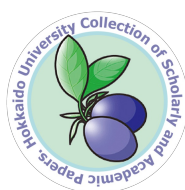




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	早産児出生より1年間の父親としての経験 : 20代前半の男性へのインタビューから
Author(s)	常田, 美和; 平塚, 志保
Citation	看護総合科学研究会誌, 9(3), 65-74
Issue Date	2006-12-28
DOI	https://doi.org/10.14943/37425
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38735
Type	journal article
File Information	9-3_p65-74.pdf



早産児出生より1年間の父親としての経験

— 20代前半の男性へのインタビューから —

常田美和¹⁾ 平塚志保²⁾

1) 日本赤十字北海道看護大学 2) 北海道大学医学部保健学科

First Year Experience of Fathers of Preterm Infants

— From Interviews of Men in Their Early 20s —

Miwa TSUNET¹⁾, Shiho HIRATSUKA²⁾

1)The Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing

2)Division of Nursing,Department of Health Sciences,School of Medicine,Hokkaido University

要 旨

本研究の目的は、早産で出生した子どもの父親のうち、20代前半の男性が、出生より1年の間に父親として経験した気持ち・考えなどの変化を明らかにすることである。研究方法は、第1子である早産児の出生より1年経過した20代前半の父親2名に半構成的面接を行い、質的帰納的に分析した。

分析の結果、【早産によるパニック状態】、【出生の安堵感】、【わが子への不安】、【わが子の成長の実感】、【父親としての実感】の5カテゴリーが抽出された。

20代前半の父親は、必然的に関わらざるを得なかった早産から1年間多くの危機を乗り越え子どもとの関係性を築いていた。とくに父親にとって実際に五感を通した子どもとの接触体験が重要であった。

他方、若い父親は、早産児の育児の大変さを妻の努力を見ながら感じていながらも、このような妻への思いは言語化することに慣れていない傾向がみられた。本研究の結果、妻とのパートナーシップをサポートすること、若い父親がゆっくりと父親としての実感を得ていく過程をサポートすることが、父親と妻子の相互関係を育てていくうえで重要であることが示唆された。

キーワード：早産児、青年期、父親、経験

I. 緒言

早産児の出生による父親自身の経験や心理状態について焦点をあてた研究^{1)~6)}では、早産児出生による不安を抱えながら父親としての役割を果たそうとする気持ちから行動し、そのことが子どもとの関係性の始まりとなることが報告されている。早産児が出生すると父親は仕事や日常生活を維持しながら、児の状態に関する説明を受け、その情報を母親に伝え、様々な手

続きの責任を担うなど多くの役割を期待される。20代前半の若い父親は、ライフサイクルにおいて青年後期に位置づけられ、エリクソンの発達課題であるアイデンティティと親密感を獲得していく途上にある。そのため、成人期の男性に比べ、自分と他者のアイデンティティを融合させ、新しい家族を築き上げ親密感を獲得する力は不十分であることが考えられる。それゆえ、結婚そして早産児の父親になる経験が、これら

の発達課題の獲得を阻害しないよう支援することは重要であると考ええる。

そこで、本研究では、20代前半にある若い男性の早産児の父親としての経験を明らかにすることを目的とした。わが国の第1子をもつ男性の平均年齢より若い男性の父親としての経験を理解することは、若い夫婦における親子関係の確立や家族支援の方向性を示すための基礎的データになると考える。

II. 研究目的

早産で出生した子どもの父親のうち、20代前半の男性が、出生より1年の間に父親として経験した気持ち・考えなどの変化を明らかにする。

III. 研究方法

1. 対象者の条件

2003年12月から2004年7月にかけて出生した第1子である早産児が、NICUに入院した経験を有する父親で、下記の条件を満たす者とした。対象者の紹介は北海道内A市内のNICUをもつ病院施設に依頼した。

- 1) 両親が児の養育に支障をきたすような心身の疾患、家庭内の問題などを有していない者
- 2) 両親は婚姻関係にあり、児は実子であること
- 3) 児が出生時より1年を経過していること
- 4) 児は単胎の早産児であること（在胎週数37週未満）
- 5) 出生体重2000g以下であること
- 6) 児に先天性疾患、奇形や神経学的後障害が無いこと
- 7) 家庭での育児において医学的処置を要しないこと
- 8) 父親の年齢が25歳未満であるもの

2. データ収集

データの収集は、2005年2月から8月で、対象者に約1時間の面接を各1回行った。面接場所は対象者の至便性に合わせて選択した。データはプライバシーの保持できる場所で、半構造化面接を実施し収集した。質問内容は、①お子

さんが生まれてから退院するまで（お子さんの入院中）の気持ち、②退院後からこれまでの気持ちと生活の変化の2点とし、記憶にあることを自由にお話していただいた。これらの質問内容を中心に自由に語っていただき、その中で対象者が早産児の父親として経験した出来事に関する状況を確認しつつ、その出来事により対象者の気持ち・考え・行動にどのような変化がみられたかを明らかにするように質問を加えた。面接内容は、対象者の承諾を得た後テープに録音した。

3. 分析方法

データ分析は質的帰納的研究方法に基づいて以下の手順で行った。

- 1) 面接を録音したテープから逐語録を作成してデータとした。
- 2) データからテーマに関係のある父親の経験を気持ち、考え、行動に着目して、文脈に留意し、類似性と相違性を考え、比較検討しながらコード化した。コード化の抽象度のレベルを上げ、その意味を適切に表現するサブカテゴリーを生成した。
- 3) 各々のサブカテゴリーのネーミングは適切か、比較分析してカテゴリー化を行った。
- 4) スーパーバイザーとの話し合いを通じて、コード化とカテゴリー化が適切に行われているかどうか検討し、抽出されたカテゴリー間の関連性を検討した。

4. 信頼性と妥当性

質的研究方法に精通している指導者のスーパービジョンを受けて、コード、サブカテゴリー、カテゴリーの妥当性について検討を重ねることで信頼性と妥当性を高めた。

5. 倫理的配慮

データ収集においては、以下の内容について口頭および書面をもって説明し、同意を得た上で研究協力の同意書に署名を依頼した。同意書は2部作成し、研究者と対象者がそれぞれ保管した。

- 1) いつでも研究への参加を断ることが可能であり、断ることによる不利益がないこと。
- 2) 答えたくない質問には答える必要がないこと。
- 3) 面接によって得られたデータは秘密を保持し、研究以外には使用しないこと。
- 4) 研究の成果は、複数対象者の内容をまとめ、個人を特定することがないように配慮すること。
- 5) 録音されたテープ、データは研究終了後早期に消去すること。

IV. 結果

1. 研究対象者の背景

対象者Aは、23歳で有職者であった。妊娠33週に経膣分娩により1,480gの男児が生まれ、子どもの入院期間は29日間であった。対象者Bは、22歳で有職者であった。妊娠26週に経膣分娩により900gの男児が生まれ、子どもの入院期間は100日間であった（表1）。

表1 対象者の背景

	対象者A	対象者B
父親の年齢	23歳	22歳
父親の職業	会社員	会社員
妻の年齢・職業	25歳・主婦	22歳・主婦
結婚年数	2年	1年
妊娠分娩経過	陣痛発来 母体搬送 経膣分娩	陣痛発来 母体搬送 経膣分娩
家族構成	核家族	核家族
児の性別	男児	男児
在胎週数	33週	26週
出生体重	1480g	900g
児の入院期間	29日	100日
面接時の児の月齢	1年2ヶ月	1年1ヶ月

対象者Aの妻の年齢は25歳、対象者Bの妻は21歳、共に専業主婦、家族構成は核家族で、結婚年数は1～2年であった。

対象者は子どもの出生当日に初回面会し、その後は子どもの状態に応じて、タッチング、抱っこ、カンガルーケア、授乳、沐浴などの子どもとの接触の機会が提供されていた。

2. 早産児出生より1年間の20代前半の父親としての経験

抽出されたサブカテゴリーは15であり、さらに意味的なまとまりにおいて5つのカテゴリー【早産によるパニック状態】、【出生の安堵感】、【わが子への不安】、【わが子の成長の実感】、【父親としての実感】、が抽出された（表2）。

以下、導き出されたカテゴリーとそれを構成するサブカテゴリーについて説明する。カテゴリーは【 】、カテゴリーを構成するサブカテゴリーは[]で示した。カテゴリーを説明するために、その内容を表すデータの一部を「 」で引用し、内容が難解であると思われる部分は（ ）で補足した。

表2 各カテゴリーとサブカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
I 早産によるパニック状態	1 子どもの生命への危惧 2 混乱状態
II 出生の安堵感	1 泣き声を聞き安心
III わが子への不安	1 赤ちゃんのイメージとのギャップ 2 父親になった実感の乏しさ 3 触れたり抱いたりする不安 4 子どもの健康への不安
IV わが子の成長の実感	1 生きている子どもを実感 2 成長の楽しみ 3 退院の喜び 4 心配の軽減
V 父親としての実感	1 育児の大変さの実感 2 自分と似ているところの発見 3 子どもや周囲の反応の変化 4 父親としての意識の変化

1) 第1 カテゴリー【早産によるパニック状態】

このカテゴリーは、2つのサブカテゴリー[子どもの生命への危惧]、[混乱状態]から構成された。子どもの出生前から出生後早期の段階における、早産による子どもの生命への危機感をもつ経験を表したものである。父親は頭の中が真っ白になるような状況の中で、最悪の状況を想定し不安を強くしていた。

「子どものことが心配でした。大丈夫なのかなーって未熟児って…。」(対象者A)

「まあ、頭が真っ白でしたよ、あせりもあったし、助からないんじゃないかと、子どもが、とにかくいちいちいな。900gって聞いて、ほんとびっくりっていうか、不安、いろんなことを考えて、最悪な場合とかも…。」(対象者B)

「なにををしているのかわからない、引っ越したばかりだったんで、住所も全然わかんなくて、頭が真っ白でしたね。その日の記憶があまりない。」(対象者B)

2) 第2 カテゴリー【出生の安堵感】

このカテゴリーは、1つのサブカテゴリー[泣き声を聞き安心]から構成された。早産という危機を乗り越えて出生した子どもの産声を聞き、無事に生まれてきた安堵感と感動から、自分も泣くという経験をしていた。

「(分娩室の)外でっていうか、すぐそばで待ってました。だいが、で、泣く声が聞こえて、自分も泣いたって感じで(笑い)。安心しましたね、もうほんと良かった。」(対象者B)

3) 第3 カテゴリー【わが子への不安】

このカテゴリーは、4つのサブカテゴリー[赤ちゃんのイメージとのギャップ]、[父親になった実感の乏しさ]、[触れたり抱いたりする不安]、[子どもの健康への不安]から構成された。思い描いていた赤ちゃんのイメージと異なりとても小さく、生きている実感の乏しい子どもの外観に不安が強くなり、自分の子どもという実感の希薄なまま、恐る恐る子どもに触れていた。そして、子どもの様々な健康問題に悩みながら、つらい気持ちで面会を継続するという経験をし

ていた。その後、子どもの退院が決まる段階においても、もし何かあったらという不安を抱えていた。

「結構すぐ面会になって、それ見てまたいろんな不安が、すごいちゃかった。イメージと全く違ったんでほんと、生きてるのかもわかんないような…。」(対象者B)

「モニターと管?口?鼻に入って、手にもついてたような、点滴?かわいそうだなーと思いました。」(対象者A)

「ずーっとピンとこなかったですね。ほんとに自分の子どもかなーっていう、結構長い間。」(対象者B)

「あんまり抱けなかったんですよ。籠みたいのに入ってって、なんか心電図みたいのとかいっぱいつけて、呼吸がどうのこうのとか、それが乱れるから、記録してるやつがわかりずらくなるからって。」(対象者A)

「初めて触ったのは、生まれた3日後です。恐かったですね、なんか、大事に言うか、ほんと触るの恐くてあんまり触れなかった。」(対象者B)

「結構病気も多かったんで、ずっと悩んだ、会うと結構つらくなるというか、見ると、何回もこういろんな病気が生まれてからずっと、あったり…病院の時はほんとにやっぱり、そんなに長い時間も居れないタイプなんです。なんか何をしたいのかわかんない。」(対象者B)

「退院は、嬉しいのもありましたけど、不安のほうが大きかったです。わりとそれも、病院にいたら、こう、もしなんかあってもすぐ、家にいたらそういうわけにいかないんで。泣いたら、なんか病気でないのかなーとか。」(対象者B)

4) 第4 カテゴリー【わが子の成長の実感】

このカテゴリーは、4つのサブカテゴリー[生きている子どもを実感]、[成長の楽しみ]、[退院の喜び]、[心配の軽減]から構成された。病院や家庭という場と時間の経過の中で、父親は子どもとのふれあいや面会を通して子どもの生命感を実感し、成長を楽しんでいた。退院にあ

たっては、同じ布団の上で寝ることができることに喜びを感じていた。そして、1年経過してやっと子どもの健康への心配が徐々に軽減するという経験をしていた。

「なんか最初はずっと寝てるんで、ずっと見てもそんな、でも時々手を握ったり、あとカンガルー教室？あれで、まさか脱ぐと思わなかったんで（笑い）あれでやっぱりこう、実感というか、なんだろう、生きてるんだなって感じた。じっと見てたらほんとに動かないっていうか、こう酸素やってるんですけど、呼吸してるのもあんまりわかんない。カンガルーではあったかかって言うか、独特の体温…」(対象者B)

「面会ではどれだけ成長したかがやっぱり楽しみだった。でもあんまり、やっぱり最初は気づかなかった、どう成長してるのかが…」(対象者B)

「ずっと目開けないでないですか、目やっと開けた時にあ一目開けたなとか、ちょっとした動きでもアーこういう風にするようになったとか、たいした成長じゃなかったんですけども、成長してるんだな—っていう実感は。」(対象者A)

「歩き出した時、2ヶ月くらい前なんですけど、急に立ち上がり、誕生日の前の日に家で。いや—立ったか！って感じでした。」(対象者A)

「“ママ”って言ったとき。それ聞いた瞬間びっくりした。帰ってたらいきなり立ってたり。」(対象者B)

「ようやく家に帰れるっていう、くつろげるって言うか、一緒にねっころがりながら、布団の上でねっころがったりとかできるし、そういうのが良いかなって感じ。」(対象者A)

「今はあまり心配じゃない、ほんとここ1ヶ月くらいじゃないですかね—心配がなくなったのは。」(対象者B)

5) 第5カテゴリ【父親としての実感】

このカテゴリは、4つのサブカテゴリ[育児の大変さの実感]、[自分と似ているところの発見]、[子どもや周囲の反応の変化]、[父親としての意識の変化]から構成された。手のかか

る子どもや妻の大変そうな様子を見て、育児に大変なエネルギーが必要なことを実感していた。しかし、育児は妻に任せきりになり、「大変だな」と思いつつも直接的に妻に言葉をかけるような行動化に至っていなかった。一方、家庭生活という子どもとの直接的な関わりや周囲の反応から父親としての自分を意識し、その変化を自覚するという経験をしていた。

「(母乳) 搾ってパックにして、で毎日持ってって、搾ってましたね、大変そうでしたね—見てて、大変なんだな—って思うことしか、その時は…いや—自分の子のためならやるんだな—自分の子のためならっていうか、これが母親のかな—って、それは今でも思うんですけど。」(対象者A)

「なんか子育ても当たり前ですけど、したことなかったんで、親とか来てもらって、なんとかあったんですけど。育児は難しい、難しいって言うか、ずっと一緒に居ないと、帰ってきたらだいたい寝てるんで、常に居ないと、そう育児はできないと。子どもが大事—というか、やっぱりいろいろ、先月だったか風邪ひいて入院して、大変で…」(対象者B)

「最近、会うのは夜だけですね—。寝てます。育児は最近はほとんどしてないですね。ほとんど—っていうくらいしてないですね。全部まかせちゃうっていう感じで…あんまりないですよね役割って、夜も遅いんで…」(対象者A)

「わが子だな—と思うのは、寝相が悪いとこかな— (笑い)」(対象者B)

「自分ではわからないですけど、周りからは言われるんですよ。父親らしくなったとか…。仕事行く時とか帰ってきた時に手振る時とか、帰ってきたら走ってきたりとか、そういうのも父親だ—って感じがしますね。」(対象者A)

「もの買うにしても、自分のもの買うなら子どもに買ってあげたい、自分の親がそうしてたようになるんだな—っていう気持ちか、や—と親になって親の気持ちがわかった—っていうか。」(対象者A)

「生まれたことで仕事もがんばらなきゃいけないとか、まあ食べさせていくとか。多分、今の同世代の友達とかと感覚が合わないというか。今、22ですけど、みんなだいたい遊んでるじゃないですか、一番遊んでる時期に、より現実的になったというか、もう、そんなに遊んでもいられないし、仕事と家庭のことで精一杯ですね。」(対象者B)

「子どもはもともと好きなほうじゃないんで、だから、育児は任せてたというか、でも最近は遊んでるのが楽しいというか。どんどんかわいくなってきた。いとおしい。今は心配はあまり

なくなりました。」(対象者B)

V. 考察

1. 早産児をもつ若い父親としての経験

本研究対象者2名の語りより得られたデータの文脈に基づき、各カテゴリーを検討した。各カテゴリーは、早産児の出生より1年間の順調な経過という時間軸のなかで、父親の経験を構成していた(図)。

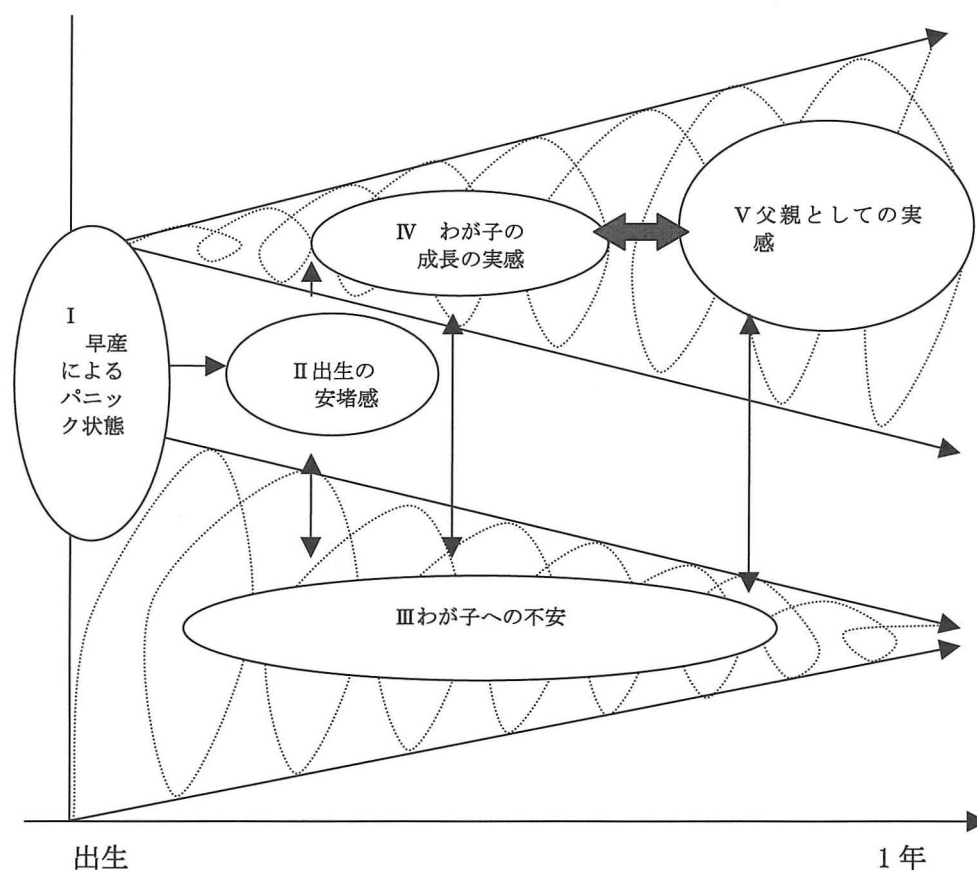


図 カテゴリー間の関連図

早産という子どもの生命を脅かすような緊迫した状況において最初に生じる経験は【早産によるパニック状態】であった。早産児の父親は、(緊急帝王切開前の)異常の認知段階にあるときに「驚き」「不安」を感じる⁷⁾。全てのことがとても早く起こるため、父親は実際に何が起

っているのか理解できず、出来事が自分のコントロールできないところで進行してしまう、という感情を経験する⁸⁾。本研究における父親も、「頭の中が真っ白になった」と語っており、自分ではどうすることもできない状況に驚き狼狽し、判断や思考のできない状態に陥っていた。

そして「最悪の場合を考える」という子どもの生存への強い不安を経験していた。これは、子どもが死ぬかもしれないということに対する気持ちの準備である予期的悲嘆を表している。また、分娩体験の満足度は父親の子どもに対する感情や父親役割への適応における父親のストレスと関連が強いとされているが^{9), 10)}、予測外の時期に驚きと不安の強い分娩を経験し、さらに自分の力ではどうすることも出来ない状況下で、眼前の事態の対応に必死な状況におかれる経験は、わが子と対面したときの感情にも影響を及ぼしていることが考えられる。

このような【早産によるパニック状態】は子どもの出生後【出生の安堵感】となり和らいでいく。父親が分娩室の外で子どもの産声を聞き、「自分も泣いた」という経験は、続いていた緊張感からくるストレスを緩和する出来事となっていた。しかし、一方で面会において目にしたわが子は父親が思い描いていた赤ちゃんのイメージと異なり、生きている実感が乏しい、という印象を父親に抱かせる。管がたくさん付いていてかわいそうな子どもの外観に父親は【わが子への不安】を経験し、自分の子どもという実感希薄であった。これは、NICUに入院した極低出生体重児の母親の心理過程における、保育器に入っている子どもを実感として受け止められない時期の状況¹¹⁾と共通している。父親は、恐る恐る子どもに触れつつも、まだ子どもに対して親密な感情を抱くには至っていなかった。

入院中の面会においては、病院は父親にとって居心地の良い場所ではなく、次々と出てくる子どもの健康問題に悩み、「会うとつらくなる」気持ちを経験していた。父親としての実感が乏しいまま、このように悩みながら面会に通う努力が続けられていた。【わが子への不安】は、子どもの退院後も「家に帰って、もし何かあったら・・・。」という子どもの健康への不安として存在していた。

一方、仕事の合間をぬい面会に通う努力を続けていた子どもの入院中から、退院して家庭生

活に入っていく時間の経過の中で、病院や家庭という場で子どもの成長発達過程を通して【わが子の成長の実感】は高まっていた。出生時のような子どもの生命の危機を感じる強い不安は軽減してゆき、出生から1年近く経過し、子どもが立ち上がったたり「ママ」と言ったりしたことを印象深く語り、子どもの成長への驚きと喜びを表現していた。その頃になり、ようやく子どもへの心配が軽減していた。このような【わが子の成長の実感】は【父親としての実感】と緊密に関連し、父親と子どもとの相互作用を発展させていく過程で相乗的に高まっていた。

初めて父親になった男性の調査^{12), 13)}から、子どもとの接触体験を契機に自分の子どもという実感、父親になったという実感が生じていたことが報告されている。同様に、20代の乳幼児をもつ日本人男性を対象とした調査においても、父親であることを最初に実感するのは、初めて子どもの顔を見たときが32%、初めて子どもを抱いたときが22%と、実際に子どもと接した場面に関する回答が半数以上を占めている¹⁴⁾。また、早産児の父親に関しても、父親の愛着（永続的絆、人間間の愛情関係と定義）の感情は、父親が初めて児を抱いた時と強く関連していることが明らかになっている¹⁵⁾。これらのことから、男性は、子どもを見たり抱いたりといった接触体験を通してわが子であるという実感を強めていくと考える。しかし、早産児の場合には、特殊な環境下で、子どもとの接触体験も限られる。加えて、多くの医療的な機器に囲まれたわが子を前に、父親は、「恐くて触れない」という不安のなかで子どもと接することになる。これは、対象者が語った「本当に自分の子どもか、長い間ピンとこなかった」という父親の実感の乏しさに影響していると考えられる。しかし、対象者がカンガルーケアで子どもの体温を直に感じ、「子どもが生きている実感」を得たと語っているように、早産児の父親にとっては、子どもを見るだけではなく、実際に触れ合うことで五感すべてを通した子どもとの接触体験が重要

であると考え。

生後1ヶ月から1年の父子関係と父性の発達についての縦断的研究¹⁶⁾では、ことに4ヶ月頃までは父親達は「自分が大変」ということよりも「妻が大変だなあ」という思いを抱いていることが明らかにされている。乳幼児をもつ20代の父親の家事・育児分担の特徴として、時間がなく妻に任せるタイプが56%を占めており¹⁵⁾、年代的に若い父親が仕事に打ち込みながら、家族との時間に不足を感じていることが報告されている¹⁷⁾。本研究の対象者の場合は、夜間でも搾乳しなければならない妻や感冒で入院しなければならない子どもに付き添う妻に対して、「大変なんだな」という言葉を使っている。すなわち、育児の大変さ、責任の重さを感じ、妻の努力に感嘆する気持ちを持っていた。しかし、これらの思いは心のうちに留められ、直接的に妻に言葉をかけたり、育児に積極的に参加したりという行動化に至ってはいなかった。その背景には仕事中心の生活があった。本研究対象者も、早朝から深夜遅くまで仕事をしなければならない若い父親であり、手のかかる子どもの育児に参加することは時間的に難しい状況にあった。子どもに愛情や関心をもつ一方で、妻の育児負担を軽減するための育児参加という気持ちが語られることはなく、妻に任せてしまっているという気持ちでいることがわかった。しかし、結婚して間もなく早産児の親となった若い夫婦は、子どもとの関係性を育てると同様に、夫婦の関係性を育てる途上にある。したがって、新たな家族システムに適応していくことが必要であり、妻との協力関係が重要と考える。父親は、育児は「両親の協力でなんとかあった」と感じており、壮年期にある両親のサポートを得られることは、若い早産児をもつ夫婦にとっては強みになると考える。

結婚して間もないうちに早産児の出産と育児を経験するという危機的状況の中にあっても、日常的な子どもとの関わりや周囲から父親らしくなったと言われることで【父親としての実感】

は高まっていた。「自分のものを買うなら子どもに買ってあげたい」、「同世代が一番遊んでいる時期だが、自分は遊びよりも仕事と家庭を優先させる」という意識が生れている。そして、同世代とは感覚が合わなくなったと感じている。つまり、必然的に関わらざるを得なかった早産から、多くの危機を乗り越え子どもとの関係性を築いてきた若い父親の経験は、父親としての自覚を促される契機となり、父親としての意識に影響を及ぼしているといえる。

2. 早産児をもつ若い父親の看護への示唆

本研究結果より、早産児をもつ若い父親の看護への示唆について述べる。

1) 妻とのパートナーシップをサポートすること

若い父親は、早産児の育児の大変さを妻の努力を見ながら感じていた。また母親としての努力に感嘆していた。しかし、このような妻への思いは言語化することに慣れていない傾向がみられた。その上、仕事の拘束時間の長さから、日々の育児は妻にまかせきりになってしまっていた。子どもへの愛情や関心をもつ一方で、妻のために育児協力という意識は低い傾向がうかがえた。看護師は父親の妻への言語化されない思いを引き出していくことで、父親と母親の双方をエンパワーメントし、父親と妻子の相互関係を育てていくことが重要であると考え。

2) 若い父親のゆっくりと父親としての実感を 得ていく過程をサポートすること

父親が「本当に自分の子どもか、長い間ピンとこなかった」と語っていたように、早産児の出生後父親が子どもとの心理的距離感をもつ背景には、思い描いていた赤ちゃんのイメージと異なり、生きている実感が乏しく、恐くて触れないなどの不安があった。そして、子どもの入院中も次々に起こる問題に直面し、つらい気持ちで面会していた。

しかし、カンガルーケアを通して子どもが生きていることを実感するという経験のように、父親にとって実際に五感を通した子どもとの接

触体験が重要である。子どもの成長発達を感じとりながら、時の経過とともに不安が軽減し、かわいいと思うようになっていた。そしてついには、自分より子どもを優先したい気持ちや遊び中心の生活を送っている同世代と、妻子をもった自分の感覚の違いを意識し、父親としての自覚が育っていた。このようにゆっくりと父親としての実感を得ていく過程をサポートするために、看護師は父親と子どもとの接触体験を促し、父親のペースで子どもと自由に触れ合うことのできる環境を提供することが大切である。そして、子どもとの相互関係から生まれる父親の実感や意識の変化を捉えながら、子どもの成長発達を共に見守る存在であることが、父親と子どもの相互関係を育てていくうえで大切であると考え。今後は、看護の立場から更に長期的な支援を実践できるシステムの確立が求められる。

VI. 結論

本研究において、早産児をもつ20歳代前半の父親2名を対象に、子どもの出生より1年間の父親としての経験を分析し、以下のことが明らかになった。

1. 早産児の父親としての経験を構成する5つのカテゴリー

第1カテゴリー：【早産によるパニック状態】

第2カテゴリー：【出生の安堵感】

第3カテゴリー：【わが子への不安】

第4カテゴリー：【わが子の成長の実感】

第5カテゴリー：【父親としての実感】

2. 本研究の限界

本研究の対象は、一施設から抽出しており、2名と少数例である。しかし、早産児をもつ若い父親を含めた家族支援の基礎的データとなると考える。

謝辞

本研究にあたり、お忙しい中面接を受け入れ、ご自身の経験をお話下さいましたお父様方に心

より感謝致します。研究にご理解とご協力下さいました長和俊先生、医療機関の皆様に感謝と共に、お礼申し上げます。

引用文献

- 1) 下田あい子, 川端百合子, 木暮知江他: 当NICUに入院となった児の父親の初回面会時における不安の分析. *Neonatal Care*, 9(11), 84-90, 1996.
- 2) 関森みゆき: NICUにおいて早産児の父親が育む我が子との関係性. 第12回日本新生児看護学会講演集, 48-49, 2002.
- 3) 山田美穂, 大原明子: 出生前・後を通じた「父親になること」への支援. *周産期医学*, 33(7), 887-891, 2003.
- 4) 北村和子, 玉里八重子: NICUに入院した児の父親への説明と愛着形成 父親のリアリティと対児感情の多様性. *愛知県母性衛生学会誌*, 20, 33-41, 2002.
- 5) 濱田美代子: NICUに入院した極低出生体重児の父親の心理状態について—出生後早期における児の受容状況—. *小児保健研究*, 56(3), 440-444, 2000.
- 6) 宮中文子, 長谷川功, 土井康生他: ハイリスク新生児を出産した母親の危機回復と父親の関連 (第1報). *小児保健研究*, 52(3), 371-376, 1993.
- 7) 大原良子: 早産児の父親—突然の妊娠中断から緊急帝王切開まで—. *看護研究*, 35(2), 57-65, 2002.
- 8) Lundqvist P, Jakobsson L: Swedish men's experiences of becoming fathers to their preterm infants. *Neonatal network*, 22(6), 25-31, 2003.
- 9) 田中恵子: 分娩後早期の父親の対児感情と出生後6ヶ月時の父親実感とその関係. *母性衛生*, 40(1), 98-102, 1999.
- 10) 岩田裕子, 森恵美, 前原澄子: 父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因. *日本看護科学会誌*, 18(3), 21-36, 1998.

- 11) 永田雅子, 永井幸代, 側島久典他: NICU入院児の母親への心理的アプローチ. 小児の精神と神経, 37(3), 197-202, 1997.
- 12) 三浦小織, 加納尚美: 初めて父親になるプロセスに関する研究. 茨城県母性衛生学会誌, 24, 28-38, 2004.
- 13) 西野美華子, 森口貴子, 山口智香子他: 妊娠・出産・育児期における父性意識の変化-初めて子どもをもった父親への実態調査から. 愛知母性衛生学会誌, 11, 5-10, 1993.
- 14) 汐見稔幸, 大日向雅美, 後藤憲子他: 第1回乳幼児の父親についての調査報告書. ベネッセ次世代育成研究所報, 31-97, 2006.
- 15) Sullivan JR: Development of father-infant attachment in fathers of preterm infants. Neonatal network, 18(7), 33-39, 1999.
- 16) 高橋種昭, 高野陽, 小宮山要他: 小児の養育における父親の役割について 第3報 厚生省心身障害研究「地域・家庭環境の小児に対する影響に関する研究」. 平成3年度報告書, 292-301, 1992.
- 17) 蛭田由美, 寺内文敏, 平山宗宏: 父親の子育て支援に関する研究. 母性衛生, 42(2), 386-393, 2001.

First Year Experience of Fathers of Preterm Infants

—From Interviews of Men in Their Early 20s—

Miwa TSUNETTA¹⁾, Shiho HIRATSUKA²⁾

1)The Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing

2)Division of Nursing, Department of Health Sciences, School of Medicine, Hokkaido University

Abstract

The objective of the present study was to elucidate changes in the thoughts and feelings of fathers (age, early 20s) of preterm infants during the first year of their experience as fathers. Semi-structured interviews were conducted with two fathers whose first child was born preterm one year prior to the study and the data were analyzed using qualitative induction.

The following five categories were identified following analysis: “state of panic due to preterm birth”, “sense of relief about childbirth”, “concern about the child”, “actual feeling of the child’s development”, and “actual feeling of being a father”.

During their premature children’s first year, fathers overcame various crises to establish relationships with their children. Contact with his child through the five senses was especially important to each father. Although young fathers felt it was difficult for their wives to take care of the premature infant, they tended to avoid expressing such thoughts to their wives.

Our findings suggest that supporting relationships between fathers and their wives, and supporting the process in which young fathers gradually become aware of their roles as fathers are important for promoting interactions between fathers and their wives and children.

Keywords: qualitative study, preterm infant, father, experience